

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24年5月31日現在

機関番号：27104

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20592530

研究課題名（和文） 看護学生の知識の構造化を目指した複数判断基準活用のためのカリキュラム開発研究

研究課題名（英文） A study to curriculum development structuring knowledge of nursing student using several criteria

研究代表者

石田 智恵美（ISHIDA CHIEMI）

福岡県立大学・看護学部・准教授

研究者番号：50352349

研究成果の概要（和文）：

学部生の講義・演習・実習において、専門基礎科目のルールが判断基準として活用されていることが確認された。特に4年生の「統合実習」では、複数の患者を受け持った際の看護実践時に複数のルールが適用されていた。また、1年次から4年次に行われる看護学演習・実習において、異なる場面で同じルールを適用させることを試みた。授業終了後のレポートでルールが活用されていたことから、ラセン型カリキュラムの思考方略の有効性が確認された。卒後1年目、2年目の思考トレーニングの研修では、記録物、終了後のアンケート調査により、研修課題の適切性と、受講生の判断基準の獲得および拡大が確認された。

研究成果の概要（英文）：

Under graduate students (1-4) used rules as their own criteria on their class, simulation, nursing practice. Especially, fourth-year students can use several rules combined for nursing practice "Integrated Training".

We advised students to apply same rule in some deferent cases on simulation or nursing practice at each time. As the results, we confirmed students use same rule under the deferent cases in their report. Therefore the strategy of spiral curriculum is considered effective of nursing practice. Then in thinking exercise for post-graduate nurses, we confirm adequacy of the tasks with in the worksheets. We also realize that they can require some criterion and extend them.

交付決定額

（金額単位：円）

|        | 直接経費      | 間接経費      | 合計        |
|--------|-----------|-----------|-----------|
| 2008年度 | 1,200,000 | 360,000   | 1,560,000 |
| 2009年度 | 1,100,000 | 330,000   | 1,430,000 |
| 2010年度 | 600,000   | 180,000   | 780,000   |
| 2011年度 | 600,000   | 180,000   | 780,000   |
| 総計     | 3,500,000 | 1,050,000 | 4,550,000 |

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：看護教育学、カリキュラム開発

## 1. 研究開始当初の背景

平成17年度から19年度にかけて実施した、「看護師を対象とした複数判断基準の活用

のための卒後教育用テキストの開発研究」（科学研究費補助金 基盤研究C，研究課題番号：17592228）に於いて、以下のような研

究成果を得ている。

1. 卒後1年目の看護師は、単に暗記した判断基準や先輩の判断基準を頼りにしている傾向が強い。

2. テキストの開発と改善のために行なった研修の、「自らの判断基準を知る」、「他者の判断基準を知る」、「自己の判断基準を拡大できる」という目的は、ほぼ達成された。従って、複数の判断基準を受講生それぞれが獲得できたと考えられる。

3. テキストの基本となったワークシートへの記述は、研修を重ねるたびに増えていた。従って、発問と応答の系列で課題が配置された、当該の研究で用いたワークシートは、記述を促し、さらには思考を促すことに効果的であることが明らかになった。

4. 判断基準を活用するためには、汎用性の高いことが前提となる。しかしながら、研修結果を見る限り、判断基準の明確化は十分に達成されておらず、今後の課題となった。

これらの結果から、看護師は何らかの判断基準を獲得しており、意図的・計画的な研修を受けることによって意識的に活用できることは明らかである。一方、卒後1年目の実態として、看護学生の時期に暗記した基準をそのまま個別の患者に適用する傾向がある。そのため、意図的な訓練を受けなければ新たな判断基準を獲得できないばかりか、個別の患者にルールを過剰適用し、医療事故を起こしかねないということが言えるだろう。これらの事柄を踏まえると、就職したと同時に実践的なケアを行なう看護師にとって、上記のような判断基準は、実務経験を開始する以前に、つまり、看護学生の時に獲得しておくべきと考える。入学後の学生に、意図的・計画的にこのような教育活動を実施することで、看護師として実務に就いた時の技術的な格差や医療過誤を防ぐことに大きな貢献をするものと思われる。そのためには、看護学生のための複数判断基準の獲得を目指す教育活動が必要である。筆者等は、既に、看護教育における、講義・演習・実習を一体化させて評価活動を行う「講義・演習・実習連携評価モデル<sup>注4)</sup>」を提示してきており、これに基づけば、看護大学の4年間を通じた、総合的なカリキュラムの開発・評価が実現可能である。また、獲得された判断基準を実際の患者に使い、適用範囲とその限界を知るという高度な思考活動のサポートに関しては、石田(2007)に基づく「動的なプログラム学習」が有効であると考えられる。特に、刻々と変化する対象を眼前にした場合、予測型の看護が必要であり、その際、複数判断基準(解剖生理学に基づいた)を持ち、看護の優先度を決定することが重要となる。さらに、学生個々で獲得している知識や知識どうしの結びつき(知識構造)は異なるため、個別の確

認作業やアドバイスが必要となる。これらの活動は上記に示した「動的なプログラム学習」が有効であることは既に明らかになっている。従って、実習においても効果的な思考訓練が実現されると考えられる。これらの教授活動と評価活動によって、その効果を確認することが、本研究目的の1つである。

注

1. J. S. ブルーナーが1960年に *The Process OF Education* で述べている、「まえに学習したことを、上級学年でもっと高い水準でくりかえすやり方」である。
2. プログラム学習を目的・目標・方法が刻々と変化する対象に適用するために開発されたストラテジーである。
3. 小児・母性・成人・老年・精神などの専門領域別看護学実習を指す。
4. 講義・演習・実習を単独で評価するのみならず、実習の結果が演習・講義の評価であり、演習の結果は講義の評価となるという考え方。

## 2. 研究の目的

本研究は、看護学生が看護問題を解決するための複数の判断基準を活用できるようになるためのカリキュラム開発およびカリキュラムモデルの提示を目的とする。

看護学生が複数の判断基準を活用できるようになるためには、次の4つの事柄が必要となる。①判断基準を獲得するために必要な知識の獲得および知識の構造化、②判断基準の獲得、③判断基準の適用訓練、④対象者の看護問題の特定。これらの実現に際して、ラセン型カリキュラム(まえに学習したことを、上級学年でもっと高い水準でくりかえすやり方)を用い、講義で獲得させるルール(判断基準)を看護技術に適用させるトレーニングを行い、看護技術の演習では判断基準を典型例に適用させ、看護学実習では、獲得したルールを、例外例を含めた実例に適用させる、また、逆に実例に起こっている事柄からルールを特定し、看護問題を導き出すという思考訓練を授業で実践する。これらの思考訓練を通して、看護学生が、卒業時において複数の判断基準を持ち、それらを就職後活用できることを目指す。

## 3. 研究の方法

看護問題を解決するために必要な、複数判断基準を活用するための方法として、学部1年次生～4年次生および卒後1年目～2年目の看護師・助産師に対し、次のような教授活動を行なう。

1年次 専門基礎科目(人体の構造・機能や病態などの科目)で学習されたルールを、専門科目である基礎看護学の講義・演習において、意図的に活用させるような教授活動を行

なう。

2年次 基礎看護学の講義・演習・実習において、専門基礎科目のルール適用状況を確認する。さらに、講義・演習・実習では、獲得されたルールを意図的に適用させるような教授活動を行なう。また、病院での実習が開始されるため、その前後で、学生の知識の構造化とルール適用状況を把握し、実習では受け持ち患者に基礎看護学の講義・演習で獲得されたルールを用いて、患者の未来を推測させるような思考を行なわせる。この学年では主に典型例にルールを適用させるような思考を展開させる。

3年次 各領域（成人・小児・母性など）の看護学実習の開始に伴い、専門基礎科目、基礎看護学の講義・演習で獲得された知識の構造化とルール適用状況を把握し、より個別の特徴を持った事例や特殊な事例について思考させ、ルールの適用範囲と適用の限界を理解させる。

4年次 各領域の看護学実習において、ルールを実際の患者に適用し、現在の状況から患者の未来を推測させるような思考を意図的に行なわせる。さらに複数のルールを組み合わせ、看護の優先度決定を行なわせる思考訓練を行なう。すべての実習の終了後に評価課題を課し、効果の判定を行なう。

卒後1年目 就職後1年目の看護師・助産師に対して、判断基準の獲得状況を把握し、活用を促進するための研修を行なう。

卒後2年目 就職後2年目の看護師・助産師に対して、判断基準の獲得状況を把握し、活用を促進するための研修を行なう。

※卒後1年目および2年目の研修は、平成17年度から19年度科学研究費補助金 基盤研究C 研究課題番号：17592228の成果に基づいたタスクマネジメントのための卒後研修を実施する。

#### 4. 研究成果

研究目的・目標に沿った研究成果は以下のとおりである。

(1) 看護学生が看護問題を解決するための複数判断基準を活用できる。

①学部1年次生および2年次生…基礎看護技術の講義・演習において、専門基礎科目（人体の構造・機能など）のメカニズム（ルール）に関する知識の獲得状況を事前課題で確認し、知識を使わせるような発問・応答を取り入れた教授活動を実施している。講義・演習のまとめで再度メカニズムを確認することで、学生の知識どうしが結びつき、判断基準としてルールを獲得できている感想がみられた。また、2年次に行われる基礎看護実習において、患者の状況をアセスメントする際に、講義・演習で学んできたルールを確認し

ながら、思考の整理をさせることにより、記録物に反映されていた。

②学部3年次生…看護学実習において、受け持ち対象者の情報の分析や将来の予測をする場合に、講義・演習で獲得されたルールを適用させ、看護問題の特定に結びつくような指導を行った。このような教授活動によって学生にとって思考の整理につながり、看護計画・実践に結びつけていた。

③学部4年次生…複数のルールを組み合わせ、優先度を決定するための判断基準に関する授業を行い、「統合実習」で複数の患者を受け持った際の看護実践時に適用されていたことが確認できた。

(2) ラセン型カリキュラムを用いた問題解決のための思考方略を開発する。

①学部生…1年次から4年次で継続して行われる看護学演習・実習において、異なる場面で同じルールを適用させ、ルールの適用を習慣化させる。年次が進むにしたがって、事例課題を典型例から例外例へと進め、ルールの適用範囲についても理解させるような教授活動を行った。その結果、授業終了後のレポートにルールの活用が反映されていた。学部生を対象としたカリキュラムモデルに関しては、卒後教育に用いたワークシートを参考にして、実習における看護実践で活用できるためのシートを作成している。今後ブラッシュアップを行い、モデルとして完成させる予定である。

②卒後1年目・2年目研修…平成17年～19年度の科学研究費補助金 基盤研究(C) 研究課題番号 17592228の成果に基づいたタスクマネジメント研修を、卒後1年目・2年目の看護師および助産師を対象として、年2～3回の研修を実施した。卒後1年目、2年目の思考トレーニングの研修は、ワークシートを用いて行った。毎回の研修終了時に評価し、対象に適した課題になるように課題を微調整し、ワークシートの内容をブラッシュアップしていった。記録物、終了後のアンケート調査により、研修課題が適切だったことが明らかになり、受講生の判断基準の獲得および拡大が確認された。このような結果により、ワークシートの大枠は変更せず、一部改変したものを改訂版として作成する予定である。また、卒後1年目研修では平成21年度からプリセプターを配置した。これにより、グループワークが効果的に行われると同時に、プリセプターが卒後1年目の思考の状況が確認できるようになり、指導にも反映させていた。

限られた時間内に看護の優先度を考え業務を配置する場合、個々の業務にどれだけの時間を要するかの見積もりを立てることが重要になる。現在までの課題では比較的シンプルな事例を数多く準備し、業務配置をするトレーニングを行ってきたが、今後は事例の

難易度を上げ、どのようなケア内容にするかという内容にも踏み込んだスケジューリングを実施していきたい。このようなトレーニングを個別およびグループで行うことで看護の質の向上に寄与できると考える。

今年度までの成果は6月16日、17日に開催される、第13回日本赤十字看護学会学術集会で発表予定である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

石田 智恵美 (ISHIDA CHIEMI)  
福岡県立大学・看護学部・准教授  
研究者番号：50352349

##### (2) 研究分担者

久米 弘 (KUME HIROSHI)  
九州大学・大学院人間環境学研究院・准教授  
研究者番号：40205175